

学生生活を振り返って

遠藤愛

東京家政学院筑波女子大学国際学部講師

1993年 筑波大学体育専門学群卒業

大学は私にとってオアシスだった。

私は、小学2年生からテニスを始めた。テニスを始めた当初は将来プロになるとは夢にも思わなかったが、大学で筑波大学を選択したことが私の人生を大きく変えたような気がする。高校時代までテニスにどっぷりつかる生活ではなかった。そこで、大学ではもっともっとテニスに打ち込みたいと思い、筑波大の環境を見て進学を決めた。大学、トレーニング施設、住居が一体化し、大学に行きながらでもトレーニング環境を確保できると思ったからである。もう一つ、私が大学を選択する際こだわった部分がある。それは総合大学という点だ。友人の中には、医者を目指すもの、外交官を目指すもの、あるいは将来は何をしようと迷っているもの、色んな人と出会いたかった。そこで女子大でもなく、単科大学でもなく、筑波大を選択したのである。この選択は正解だった。この環境をフル活用して、私は

自分のテニスに打ち込みながらも、自分自身を取り巻く世界を広げていけたと思う。

自分で選択した学生生活とはいえ、それはそれはタフな毎日だったと思う。学校、練習、休息、そして試合。勝つか負けるか、上にあがるか、下に落ちるか、毎日が戦いであった。私は過去を振り返ることが嫌いだった。ひたすら前だけを見つめて、自分が選んだ環境、道を精一杯生きた。無我夢中だった。ある時友人に言われた。「まなは生き急いでいるよね」。確かにそうかもしれない。私は明日を信じていない。今ここで手にしているこの時間しか信じていない。だから確実に今、手にしているこの時間を目一杯生きたいのだ。「明日やればいいや、明日がんばればいいや」の「明日」ってほんとにあるかわからないじゃん。」自分で自分によく言い聞かせていた。

競技者としての結果は、大学に入って伸びた方だと思う。思いもなかったプロブ

レーヤーに大学3年で転向した。自分の世界は急速に変化し、広がっていった。プロとして世界を転戦しつつ学生生活も続けるという生活の中で、大学は私にとってオアシスだった。プロになってからは、コートの中だけでなく、生活においても常に勝ち負けがついて回った。ただ一つ、大学で友人と接しているとき、講義を聴いているときだけはその勝ち負けから解放された。友人は私のランキングに関係なく、‘テニスの’という形容詞なしに、‘同級生の遠藤愛’として接してくれた。それが私の心を癒してくれた。次に戦う英気を養ってくれた。サンキュー(=^_^=) みんな！私は友人達と飲み会に行った記憶はほとんどない。大学以外の場所で遊んだ記憶もあまりない。でも自分の学生生活に悔いはない。筑波大の環境を最大限に活用させていただいた。それは、物理的なものだけでなく、知識の面でもだ。自分が望みさえすれば、アスリートとしての自分に必要な知識をいくらでも吸収することができた。いつもいつもたくさんの先生方に応援していただいた。だからプロになっても筑波大にこだわった。所属契約はせず、筑波大、筑波大大学院所属で私のプロ生活は通した。友達と飲み会にも行かない、遊びにも行かない、そんな学生生活あり？とよく友人に笑われた。私も一緒に笑った。「目標があるんで

いっ！」ひたすら上だけを見つめて、自分の夢、目標を追うことに迷いはなかったと思う。

私は、小さな時から「テニスプレーヤーである前に1人の人間であることを忘れないように」といわれて育ってきた。大学に入ってもう一つ心に残る言葉を頂いた。「肩書きではなく‘心のプロ’になれ。それが真のプロ’だ。競技者としてどうあるべきかを学び、人として大切なことを教わった大学生活。私はよく「テニスを通して得たものはなんですか？」と聞かれる。「いくらのお金も得たかもしれない。人ができない経験をすることができたかもしれない。でも私の大切な宝物はお金では買えない友人達とのつながりかな。」私はいつもこう答える。大学時代に‘テニスの’という形容なく私を見つめてくれ、受け入れてくれた友人とは今もよき仲間である。彼女、彼らがいたからこそ私は戦うことができたと思う。試合ですりへった神経もあのひろーいキャンパスに帰ってきたら不思議と自分を取り戻せた。過去を振り返ることを極端に嫌ってきたけれど、もしまた振り出しに戻って大学を選択することになったら、私はまた筑波大を選んじゃうかな。私の涙と汗、それにたたくさんの笑い！がまったあのテニスコートで、また‘死に物狂い’でがんばっちゃうかな。世間一般の‘女子

大生'とは随分違う学生生活だったかもしれないけど・・・もいっかいやってもいいかな、遠藤愛の学生生活(=^_^=)

「みんながみんな、まなのように夢を持って、希望に燃えて生きてる訳じゃないんだよ」そういう友人もいた。私の得意技は、夢を見つけることかなあ・・・と思う。卒業して10年が過ぎた。そして、その10年目にまたしても私は別の夢を抱いて、大学講師の仕事をしながら筑波大ドクターコースに編入した。勢いで編入してみたものの、これから先本当に大変そうだが、また新しいことにチャレンジする毎日が気に入っている。私の夢の一つは、死ぬ時になっても「夢は枯野を駆け巡る」ような人生だ。さて、新しい目標に向かって、遠藤愛、出発させていただきます！

えんどう まな